

2. 事業の概要

(1) 教育方針

① 生徒受け入れ方針

従来から多様な生徒に「我が子として入学から一生涯を」の教育理念の下、少人数の学習集団で体験的・総合的な学習活動の実践により、学習効果をより高め支援するためインクルーシブな受け入れをする。永年継続して来たこの教育方針は、中学校や地域社会からも一定の評価と理解が得られており、松本市をはじめ諸団体との連携や活動により生徒の自己肯定感の醸成に繋がり、学校への出席率の向上にも寄与していると評価する。

② 教学及び情報公開等（監査・評価・改善等）

③ 教育課程編成

教育方針の具現化（少人数でわかる授業）のための教育課程を編成している。

1年生には、習熟度別授業を取り入れクラス数を増加して少人数化を図る。

2年生からは、普通科にコース制・美術科には専攻別を取り入れて更に少人数化と専門性を高める。

④ 海外研修旅行について

本校生徒の教場は、「実体験を伴う教室を含めたあらゆるところが学ぶ場所である」の教育方針で、姉妹校における交流とホームステイを中心とした海外研修旅行を大切にしてきたが、令和5年度も猛威を振った新型コロナウイルスの感染防止のため3科共に中断を余儀なくされた。＜普通科＞平成7年から実施している海外旅行は、平成12年よりホームステイ及び現地高校生との交流（アクティブ）を取り入れた研修旅行へと発展させた。主体的で積極的なコミュニケーション活動により生徒達は意思伝達の大切さを体得し、その達成感と共に自信の獲得にも大きく寄与している。今後復活した場合は、姉妹校の国立彰化女子高級中学校との交流を大切にしつつも、1泊となっているホームステイを2泊に戻したいと考える。

＜福祉科＞福祉に関する専門的な研修を求めて先進国（北欧）での研修をしたいという生徒達の強い要望があり、法人が長年研究をしてきたデンマーク王国への研修旅行を令和元年11月に実施した。福祉施設の見学や高校生との交流、現地スコーレ（国民学校）での「デンマークの福祉に対する考え方」等の講義、アンデルセンの生家見学等良い研修が出来たが令和3年度はコロナウィルスの流行で実施できなかった。順延を模索した令和4年もコロナ及びロシアの上空を飛行できない影響もあって中止、国内で代替実施した。令和5年度は、更に円安も伴いデンマーク王国への研修旅行は中止した。一方で令和5年10月にデンマーク王国からは、福祉科の交流先となっているノーフェンス高等学校の生徒19名が来校し、平成24年に続き2回目の交流を実施した。

＜美術科＞科の特色を生かし、長年続けて来たパリへの研修旅行はテロ事件で5年間中断を得ていたがヨーロッパの治安の回復もあり、令和元年11月福祉科と同時に復活させた。こちらもコロナの関係等で再び中断している。科内で「科の特色を生かした研修旅行」を検討する雰囲気があり支援したい。

⑤ 計画検討中の施設設備について

教育環境の整備は最重要課題と捉え法人の安定的な経営を睨みながら周年事業に位置付けて充実

に努めてきた。今後も施設設備の延命化を図りつつ残された体育館の整備を計画的に進めていく。重点目標に挙げてきた校地の拡充は、今年度ガラス温室の移転候補地の一部 210.39 m²を取得し、運動場を予定する小岩井氏の土地については借用することで話をまとめることが出来たのでガラス温室の移転⇒運動場の整備⇒体育館の建設の環境が整った。平成 26 年に策定した中長期計画の土地の取得率は約 80%を確保することが出来た。

建物の整備では、多様性・個別性・内包性に配慮してのトイレの改修や空調設備の更新に取り組んだ。

今後は、80 周年記念事業の体育館の改築に向けた手順を計画的に進める。

(3) 支援活動

① P T A ・ 振 興 会

コロナ禍で中断していたが令和 5 年度復活させた P T A ・ 振興会総会には 50%を越す会員の皆さんが参加した。この状況は、中断した年度を除き定着していた。公開講座や合唱フェスティバル・強歩大会等生徒の学習活動にも当事者として参加することで、学校の方針や状況をより深く理解し、建設的な提言を頂いてきた。

振興会は、卒業生の保護者が中心となり本校の教育環境を整備することを目的に結成された組織であり、校舎の改築や校地の拡充のための資金集めを計画的に行っている。永年会長を務めた小出忠久氏に代わって令和 5 年度の総会で伊藤覚氏が会長に就いた。

② 同窓会活動

同窓会総会等活動への参加者数は多くは無いが、日頃学校を訪れる卒業生は多く母校を想う気持ちの強い卒業生が多い。このような卒業生を束ねる同窓会の力は、我が校にとっては大切である。「入学から一生涯を」は我が校のモットーであり、教職員と卒業生が一生涯を通じて響き合える絆は本校教育の根幹をなすものであり大切にしたい。

③ 花いっぱい運動

松本で始まった花いっぱい運動の当初から関わりを持った、本学園創立者で初代理事長の土手内頼人氏の熱心な取り組みは、大きな推進力となったためその後も学校の教育理念と相通じることもあり、花壇の管理や助言、さらにはフラワーコンテスト、花壇コンクール等各種審査員の派遣等に積極的に関わりを持ってきた。松本の地に根を下ろす本校が、松本から全国へさらに世界にまで発展してきたこの運動を大切にしながら幅広く環境問題にまで発展させて来た教育活動を地域に開かれた学校づくりの意味からもさらに大切にしたい。

④ 松本芸術文化協会

第 2 代の理事長故土手内始男(白樹)氏が日本画を修め、美術科誕生のきっかけにもなったこともあって松本芸術文化協会の活動を支援してきた。芸文協の理事をはじめ各種展覧会の審査員として本校教員が積極的に関与するこの活動を支援することは、文化の発信基地としての存在意味からも大切であると考えます。

(4) 広報活動

開かれた学校づくりを推進するため、日頃の活動状況を発信し地域社会の方々に理解を深めてもらう活動は、法人にとって大切な広報活動の一つである。限られた予算の中から効果的に情報を発信するためには、様々なメディアを積極的に活用し、中でも紙媒体はラジオ・TVと違い活字として長く目に着くことから令和 5 年度も積極的に利用してきた。その主なものは下記の通り

である。

① 学校アピール広告

「美術科卒業展」 MGプレス

② 入試及び創立 70 周年関係等周知広告

信濃毎日新聞・市民タイムス・タウン情報

③ 儀礼広告 年賀・暑中見舞い（信毎・市民タイムス・県民新聞広告）

④ その他

ニュースとしてNHKやケーブルTV、信毎・市民タイムス等から取材を多数受けた。

(5) 学習活動等の概要

① 普通科 「国際理解」「環境科学」「生活文化」「園芸農業」4 コース制

ア. 普通科の年間活動目標

- ・ 生徒自らが学校は有意義な場所であると自覚できる教育を展開する。
- ・ 楽しくわかる授業を実践し、学び合うことを味わえる集団づくりや人間関係づくりを重視する。

イ. 普通科の重点課題

- ・ 社会適応力を養成していく。

（挨拶・礼儀の徹底。対外学習機会の充実→ 校外活動への積極的参加）

- ・ すべての生徒の基礎学力を定着させる。

ウ. 教育課程の研究に取組みより充実した教育内容を模索する。

- ・ 園芸農業の技術・知識習得を通し、逞しい人間力・社会人力の定着をはかる。（園農）
- ・ 調理・服飾の専門知識・技能の習得を中心に保育・介護等家庭生活力の伸長を図る。
- ・ 環境保全に寄与する態度の育成。（環境）
- ・ 日本文化・伝統の理解と異国文化（世界）の理解。使える外国語（英語）の習得。

エ. 具現化に向けた取組み

- ・ インクルーシブな学習環境における「学び合い」を実践する。「国際理解」「環境科学」「生活文化」コースの学習発表会は横から縦に学習を広げる取り組みで生徒のプレゼンテーション能力を高めると共に生徒自身の学習目標も明確にする。
- ・ 校外活動の活発化。外部団体との共同活動。→ 継続のものはより内容の充実へ 新規ものを開拓する。

② 美術科

ア. 美術科の年間活動目標 困難にめげない強い心を持つ生徒の育成

イ. 期待する生徒像・理念

素描を基本に、徹底した基礎力・表現力を専門分野に生かした進路実現が出来る能力を身につけ、自ら考え行動でき、美術科生としてのプライドを持って将来社会貢献できる人材の育成

ウ. 今年度活動目標・重点課題・具現化する取り組み

- ・ 「個」の育成・充実 ・ 集中力と反復力を付ける。・ 自分で判断できる思考力をつける。
- ・ 美術における基礎・基本内容を個々や全体で徹底的に理解・修得・実践でき、協働する

ことや表現において他者理解が出来るなどコミュニケーション力をつける。・講評に相互鑑賞を取り入れるなどして実のある振り返り学習を展開する。

エ. 将来の目標を持ち、学力向上・進路実現へ

◎学力をつける。

- ・模試の積極的実施
- ・センター試験では受験者増→受験者全員 6割を目指す→入試研究・調査・学科充実
- ・一般受験者→強い精神力を・一般受験者の卒制との両立実現サポート
- ・進路先の改革：自ら主体的に情報を取り入れる力をつける。経済的困難な生徒への対応

③福祉科

ア. 福祉科の年間活動目標

『介護福祉士の養成（資格取得の実現）』『福祉マインドの育成』『社会貢献できる人材を育成する』

- ・体験学習から、自ら考える力を身に付ける。
- ・福祉科の外部での活動に力を入れる。
- ・国家試験に対応できる学力をつける。

イ. 結果と課題

- ・入学者数は、平成21年介護福祉士養成指定校（新カリ）への移行後確実に増加して来ていたが令和4, 5, 6年度は、定員の50%を割っている。
- ・福井県の介護技術コンテストに2名が参加者。2名が見学する等外部活動にも取組めた。
- ・生徒は、高い目的意識を持っており積極的に学習や活動に参加し、介護福祉士の合格率も確実に向上（H23年以前は平均24.3%）してきて88.38%に達している。

参考資料（現役合格率）

卒業年度	入学者数	卒業者数	卒時合格数	合格率	備考	令6.3.31現
平成15	7	6	0	0%		1
平成16	5	4	1	25%		1
平成17	7	6	2	33%		2
平成18	13	5	1	20%		1
平成19	8	9	3	33%		3
平成20	10	8	1	13%		4
平成21	12	10	3	30%		9
平成22	7	5	2	40%		4
平成23	11	7	5	71%	養成校指定	6
平成24	18	18	10	56%		13
平成25	13	11	11	100%		11
平成26	21	21	16	76%		17
平成27	14	13	13	100%		13
平成28	17	15	14	93%		14
平成29	9	9	8	89%		9

平成 30	17	14	13	93%	受験者 14	15
令和元年	11	7	6	86%		6
令和 2 年	10	8	6	100%	受験者 6	8
令和 3 年	9	5	5	100%	受験者 5	5
令和 4 年	14	13	13	100%	受験者 13	13
令和 5 年	14	13	11	84.6%	受験者 13	11
令和 6 年	7					
令和 7 年	7					
令和 8 年	5					
計	261	211	144	63.9%		
新カリ以降	192	159	131	88.7%	平成 23 年以降	

④教育職員の取組み

入学してくる生徒一人一人のスタート地点には、大きなばらつきがあるので分かる授業・身に着く授業の工夫と展開に努め、既成概念を取り払いプロとしての自覚の下指導力を高め生徒一人一人の欲求に応えたい。

⑤開かれた学校づくりへの取組み

ア. 公共団体や地域諸団体との連携、更に校外へ出て鉢花の販売や苗の頒布、福祉科のボランティア活動・美術科の活動等を通し、地域から愛され必要とされる学校づくりに努め、文化の発信基地としての力を更に高めたい。

イ. 公開授業 学内向け・地域社会向けにスケジュールの込み合う中で積極的に取り組んで

だが永年続けて来た寄せ植え講座等が今年度も中止に追い込まれた。しかし、生徒が製作した寄せ植え作品の販売は好評で 30 分間で完売している。

ウ. 学校評価 学校改善に繋げるため、学外の 8 名に評価委員を委嘱し年 2 回それぞれの立場から授業及び行事・生徒会活動や生活面、生徒の学外活動等について率直な意見や評価を求めてきた。